

土方巽 暗黒舞踏 ―受苦の身体の呈示―

Ankoku butoh Hijikata Tatsumi

有賀 みさと (Misato Aruga) 指導：蔵持 不三也

研究対象は暗黒舞踏である。暗黒舞踏は、舞踊研究家である國吉和子の言葉を借りれば、1950年から1960年にかけて土方巽（1928－86）によってはじめられた肉体表現および肉体をめぐる思考のことである。舞踏は、それまでの舞踊の舞台にとってあまりに異形なるものであり、その登場の当初には、それに対する客観的評価基準を見出すことが急がれた。1980年代に至るまで、その役割を担っていたのは舞踊批評家の活動であり、したがって、それまでの舞踏の研究といった場合、舞台評論がほとんどである。1986年、土方死去の後、土方およびその舞踏の資料が整備され、1998年には、慶応義塾大学アートセンターが土方巽アーカイヴを開設した。これを契機に舞踏研究が促進され、土方作品の成立の背景および、作品を成立させている美術、音楽などの舞台構成要素を対象とする作品研究、土方巽のテキスト作品の分析研究、舞踏の技法の特性を分析する研究、発達心理学的視点からの舞踏の意義を考察する研究、舞踏の美学・哲学的考察、シュルレアリスムとの関係において舞踏を再構築する試みなどがなされてきた。いずれの研究も土方の舞踏の解明に力点が置かれている。本研究も土方の舞踏―暗黒舞踏―の解明にかわりはない。

ところで、土方が活躍した1960年代という時代は、旧来の文化的・思想的規範に対する対抗文化のヘゲモニー闘争の時代であった。それは、文学、思想から発して、建築、演劇、映画、美術等々にまで及び、既成の価値の転覆を志向するという形で噴出したのであった。そこには2つの命題があった。ひとつは、それまでの芸術を支えてきた芸術観の排除であり、もうひとつは、各芸術における伝統的な表現形式からの脱却である。60年代は、この二つの命題をめぐる様々な試みが展開されたと捉えることができる。土方の暗黒舞踏もこれに呼応して誕生し、発展したといっても間違いではないだろう。そこで、本研究においては、それらの芸術活動との相互関係のうちに、暗黒舞踏が辿った独自の過程を、時代という背景の上に描き出してみたい。また、ダンスというひとつの芸術形式の歴史的な流れにおいて、暗黒舞踏が辿った過程も描き出してみたい。

従来の舞踏研究においては、こうして芸術全体の動きや流れをつかみ、それとの相互関係のうちに暗黒舞踏を論じる、という試みが少なかった。本研究においては、従来の

局所的であるが精緻なる舞踏分析の上部階層にあたる、全体的な見取り図を提供できたように思う。

土方は、その初期の作品において犯罪や暴力、あるいは残酷さといったモチーフを用いた。それらは、歴史や社会、政治、経済にわたる支配的制度の統制の外に位置する過剰なものである。彼は、それを、「文明」の支配的な力に拮抗する力として刮目した。こうして、初期の土方の肉体は、文明に批判的に対峙して反乱するものとしてあった。ところが、晩年の土方は、肉体の強さよりも弱さの方に目を向けた。そして、「衰弱体」というものを採集し、そこに自らの舞踏を求めた。「衰弱体」も、反文明としての文化のあり方を示す道程としてイメージされたにちがいない。だが、それは、人間が衰え、弱っていくことを強調しているものであり、もはや文明の力に拮抗する力は有していないように筆者には感ぜられた。身体がもし自然へと展開する力であるならば、「衰弱体」はそれを断ち切り、身体そのものを排除する力でもある。こうして、晩年の土方においては、ついに身体そのものが否定されるに至るのである。だが、実は、土方が否定したのは身体そのものではない。何か。身体に浸透するあらゆる限定を、否定しようとしたのである。

1960年代、日本は高度成長期の只中にあり、文明の浸食力の強さが圧倒的であった。それゆえ、それに抗しようとする表現は、「衰弱」という否定形をとらざるを得なかったのかもしれない。わたくしたちの身体は、受苦的で、病み、衰え弱り、やがては消滅していくものにちがいない。だが、わたくしたちの身体は、なによりもまず「生き」て在る。今後の芸術は、「病む」以前に「生きて」あるということに目を向けなくてはならないだろう。